

トルストイ民話集より 石井忠雄脚色 **「靴屋のマルチン」**

<前編>

- ナレーション　　ここは寒い北の国、ロシアの小さな田舎の村です。もうずいぶん昔のこと、この村にマルチンという年老いた靴屋が住んでいました。大分前に奥さんを亡くし、イワンという息子と二人で暮らしておりました。そのイワンも大きくなり、しきりに家を出たがっていました。
- マルチン　　イワン、どうだい、この靴のできばえは？　自分で言うのもなんだが、傑作だと思うのだが。
- イワン　　ああ。…でもだれが履くんだい、そんな小さな靴。
- マルチン　　そりゃあ、店に置いておけば、だれか必要な人が買っていけよう。ところでイワン、どうだい、考え直して、お父さんの跡を継いでくれないか？　ここにいる、一緒に暮らそうじゃないか。
- イワン　　またその話かい。僕は、こんな田舎で暮らすのはウンザリなんだ。それに、一生靴を作って終わるなんて、ごめんだね。みんな都会に出ていっているんだ。それに、どうせこの仕事もお父さん限りだろう。だったら、この財産を今、僕にくれよ。都会に行くにはお金が要るんだよ。
- マルチン　　どいつもこいつも自分のことばかり…。ようし、それならそれでいい。お前なんかわたしの子供じゃない。さっさと家を出ていけ！　お前の顔なんか二度と見たくない。
- ナレーション　　イワンはもらうものをもらうと、家を出て行ってしまいました。そして、マルチンは独りぼっちになってしまったのです。
- 子供　　おじちゃん、お仕事しているの？　入ってもいい？
- マルチン　　ああ、坊やかい。いいよ。坊やは靴屋になりたいのかい？
- 子供　　うん。おじちゃんのように、すてきな靴を作りたいな。出も僕の家、もうじき越しちゃうの。だから、おじさんのお仕事見るの、今日が最後なの。
- マルチン　　そうかい。それはお名残惜しいね。皆、この村から出ていってしまうんだね。
- ナレーション　　——と、家々にともる明かりを見ながら、マルチンは深いため息をつくのでした。そんなある日、近くに住むソーニャという婦人がマルチンを訪ねてきました。
- ソーニャ　　マルチン、近ごろどう？　ずいぶんと浮かない顔をしてるじゃないか。
- マルチン　　ソーニャかい。お前さんは、いつも明るくていいね。どうしてそんな顔をしてられるんだい？
- ソーニャ　　そりゃあ、イエス様がわたしと一緒にだもの。
- マルチン　　そうかい。お前さんには、そんな連れ合いがいるんかい。わしなどは、家内に

先立たれ、男手ひとつで育てた息子にも見捨てられ、何を頼りに生きていったらいいか。そう思うとね…。

ソーニャ　　そうだったのかい。わたしには、一人暮らしで、ノンビリと人生を楽しんでいるように思えたんだがね。そう言われてみれば、一人ぼっちというのもつらいもんだね。それじゃどうだい、わたしの信じているイエス様を信じてみないかい？

マルチン　　イエス様？　それはお前さんのだんなじゃないのかね？

ソーニャ　　(大笑い)そりゃあ、わたしのだんなじゃないよ。マルチンは聖書というものを読んだことがないのかい？

マルチン　　そうだねえ。子供のころ、父親に連れられて、教会に行った時、よく聖書のお話は聞いたがねえ。

ソーニャ　　そうかい。それじゃ、ここに聖書があるから読んでごらんよ。

マルチン　　(読む)ある人に息子が二人あった。弟が父に、「お父さん、私に財産の分け前をください」と言った。それで父は、身代を二人に分けてやった。それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩^{ほうとう}して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大飢饉^{きげん}が起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べるイナゴ豆で腹を満たしたいほどであったが、だれ一人彼に与えようとはしなかった。しかし、我に帰った時彼は、こう言った。「父のところには、パンの有り余っている雇い人が大勢いるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』」。こうして彼は立ち上がり、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。息子は言った。「お父さん、私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」ところが父親は、しもべたちに言った。「急いで一番よい着物を持ってきて、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足に靴を履かせなさい。そして肥えた子牛を引いてきてほふらせなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」(ルカの福音書 15:11-24)

ふーん。わしの息子みたいなのは、どこにでもいるんだね。だがわしは、イワンが帰ってきても、この父親みたいに、優しく迎えてはやらんぞ。父親を見捨てた者は、それ相応の罰を受けるのは当然だからな。

ソーニャ　　マルチン、ここに出てくるのは、お前さんの息子じゃなくて、お前さん自身のこ

となんだよ。

マルチン

なんだって？ なぜこの息子がわし自身なんだい？

ソーニャ

わたしたち人間は、神様から離れて、神様がどんなに愛してくれても、知らん顔で自分勝手なことばかりしている。でも、そんな自分の姿に気がついて、神様のもとに帰れば、神様は喜んでわたしたちを迎え入れてくださる。さっきお前さんは、「子供のころに教会に通っていた」と言ったろう？ でもそのあとは、ずーっと神様のことは忘れていたじゃないか。でも神様は、お前さんが神様のところに戻ってきて、礼拝をささげるのをずーっと待っておられるのだよ。

マルチン

そう言われれば、わしは今まで神様のことなど、ちっとも考えてこなかったよ。

ソーニャ

そうそう、あさってはクリスマスだね。わたしたちが、神様に背いて犯した罪の罰を、わたしたちに代わって受けてくださった神の子イエス様の誕生をお祝いする日だよ。

マルチン

ソーニャと一緒におられるという、あのイエス様のことだね？

ソーニャ

そうだよ。明日の晩はね、クリスマスイブで、教会で礼拝とお祝いがあるから、あんたもおいでよ。

ナレーション

マルチンは、昔、父親に連れられて通ったころのクリスマスを思い出していました。雪の中にともる教会の明かり、色とりどりに輝くクリスマスツリー、人々の楽しい会話、美しい賛美歌…。マルチンは、久しぶりに教会に行ってみることにしました。

(教会で)

ソーニャ

マルチン、ようこそ。よく来てくれたね。

マルチン

楽しそうだね、ソーニャ。ゆうべ、聖書を読みましたよ。イエスさまは、わしのような、息子を憎み、他人をうらやむような罪深い者のために、十字架にかかって死んでくださったことが、よく分かったよ。そのイエス様がよみがえって、今、わしと共にいてくださる。今年のクリスマスは、今までになく、心からお祝いできるような気がするよ。

ナレーション

厳粛な中にも、楽しいお祝いの会が終わり、家に帰ると、マルチンは、教会でのクリスマスが楽しただけに、寂しさが身に染みてきました。

マルチン

うーん。一人ぼっちなのは、寂しいものだなあ。イエス様が一緒にいてくださると言うのに、なんていうことだ。そうだ、聖書を読みましょう。少しは気が紛れるかもしれん。

マルチン

(読む)そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか？ わたしがこの家に入ってきた時、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入ってきた時から、足に口づけし手や見ませんでした。」(ルカの福音書 7:44、45)

そうか、わしは今まで自分のことしか考えていなかった。イエス様のために何一つしていなかった。まるで、まるでここに出てくるシモンみたいにだ。

ナレーション マルチンは、しばらく考え込んでいるうちに、うとうとと居眠りを始めました。すると、どこかから――

イエスの声 (エコー) マルチン、マルチン。

ナレーション 眠い目をこすって、マルチンは立ち上がると――

マルチン だれかな、今ごろわしを呼ぶのは？ どなたかな？(間)もしかしたら、イワンが帰ってきたのじゃないだろうか？

(効果音) (戸を開けてみる)

マルチン だれもおらんぞ。

ナレーション マルチンが再び部屋に戻ると――

イエスの声 (エコー) マルチン、マルチン。

ナレーション 今度ははっきりと聞こえました。マルチンが、窓のほうを見つめると――

イエスの声 (エコー) マルチン。わたしはあした、あなたの家に行きます。待っていてください。わたしはだれかって？ あなたがよく知っている者です。必ず伺いますから、窓の外をしっかりと見張っていなさい。

マルチン イエス様かな？ イエス様が来てくれるなら、本当にうれしいんだが。そうだ、お迎えする準備をしなければ。イエス様に何を差し上げよう。わしの一番大切なもの、そう、この間作ったこの小さな靴。これがいい。いや、その前に家を片付けなければ。お茶をわかし、お菓子を用意しなければ。いや、今夜は早く寝よう。明日の朝早く起きて準備に取りかかろう。

ナレーション マルチンは、明かりを消すと、急いでベッドに入りました。遠くでクリスマス・キャロルを歌う声が、聞こえています。

<後編>

イエスの声 (エコー) マルチン、マルチン。わたしは明日、あなたの家に行きます。待っていてください。

マルチン (ハッと目覚める) 夢か。いや、昨日確かに聞いた声だ。イエス様がわしの家に来てくれるなんて本当だろうか？ 「必ず行くから窓の外を見ているように」と確かに言った。そうだ、こんなことはしてられない。家を片付けて、お迎えする準備をするのだ。

ナレーション マルチンは、ストーブに火を入れ、お茶をわかし、朝食に取りかかりました。その後、部屋を片付けると、仕事場に座り、窓の外を眺めていました。外には、ゆうべ降った雪が積もっています。道路掃除夫のステファニーが、一生懸命に雪かきをしているのが見えます。

マルチン モノローグ ああ、ステファニーも年を取っているのに大変なことだ。もう少し若いのを使

えばいいのに。おやおや、転んでしまった。いや、わしは何を考えているのだ。イエス様が来てくださるというのに、人の困っているのを笑っていいのだろうか？ これこそ、自分のことしか考えないシモンのようにないか。おお、ステファニーの仕事も一区切りついたようだ。

- マルチン おーい、ステファニー、どうだい、ちょっとここに来て休まないかい？
- ステファニー ありがとう。年を取ってからの雪かき仕事は骨が折れるよ。特に腰が痛くてね。
- マルチン さあ さあ、ストーブのそばに座って。今、熱いお茶を入れるから。
- ステファニー どうしたんだい、マルチン？ ずいぶんうれしそうだね。何かあるのかい？ ああ、そうか、イワンが帰ってくるのだろうか？ どうしてって、さっきから外ばかり気にしているじゃないか。
- マルチン まあ、息子にも帰ってきてほしいが、今日はずっとすてきなお客様が来るんだよ。それは、イエスという方だ。
- ステファニー イエス？ あの紙のみ子の…。信じられないね。
- マルチン そうさ。わしもだよ。でも、ゆうべはっきり声を聞いたんだ。あ、もう一杯どうかね？ 熱いのを入れるよ。
- ステファニー どうもありがとう。そんなすばらしいお客があるなんて、マルチンも幸せだね。いや、ずいぶん邪魔しちゃった。温まったら、お陰で腰の痛みも楽になった。それでは、もう一仕事してくるか。マルチン、ありがとう。マルチンの家に、きっとイエス様は訪れてくださるよ。
- ナレーション ステファニーは、そう言うと、また雪かきの仕事に取りかかりました。マルチンは、イエス様にお出しするお茶をステファニーに出してしまったので、お茶をわかし直し、また外を見ていました。
- マルチン モノローグ イエス様は、いついらっしゃるのかなあ。昨日聞いておくべきだったよ。そうすれば、こんなに気を遣わなくて済むのに。
- ナレーション しばらくすると、今度は、見慣れない婦人が小さい赤ちゃんを抱いてやってきました。貧しい身なりで、疲れ切った様子。赤ちゃんは泣いています。
- マルチン モノローグ かわいそうに。赤ちゃんは、きっとおなかをすかしているんだ。
- ナレーション と思うとマルチンは、じっとしていられなくなり、外に飛び出し、婦人に声をかけました。
- マルチン おーい、その婦人。どうなされたのだ？ 赤ちゃんがひどく泣いているじゃないか。
- 婦人 はい、この子は、おなかですいているのに、ミルクがないのです。
- マルチン それはかわいそうに。まあ、こんな寒い外にいないで、家に入りなさい。今、ミルクを買ってきてあげよう。
- ナレーション マルチンは、ミルクを手に入れると、温め、赤ちゃんに飲ませました。

マルチン こんな寒い時に一体どうしたのかね？

婦人 はい、わたしの主人は、兵士ですから、戦場に送られたまま、なんの音さたもないのです。わたしたち親子には生活ができず、仕事を探していたのですが、子連れじゃどこでも働けず、今日やっと決まって、そこに行く途中なのです。

マルチン そうだったのかい。でも働くところが見つかって、本当によかった。ご主人が元気でいて、帰ってこられるといいがね。それまでしっかりやるんだよ。そうそう、この寒空に、赤ちゃんが素足のままじゃかわいそうだ。この靴はどうかね？

 いや、今日ね、わたしのところにイエス様がおいでになるんだ。その時の贈り物にと思っていたのだが、まあいいや。イエス様には何か別のものを考えよう。これはわしの作った最高傑作だ。履かせてあげなさい。ほら、ピッタリじゃないか。こんなにピッタリなのは初めてだよ。これはわたしからのプレゼントだ。子供は大事に育てるのだよ。

婦人 はい。何から何まで本当にありがとうございました。わたしもこれで、この子を育てながら、働く勇気が出ました。この家にきっとイエス様が来られますように。

ナレーション 婦人は、何度も何度もお礼を言って去っていきました。マルチンは、また窓のところで外を見ていました。窓の外はいろいろな人が通りますが、イエス様らしい人は来ません。時間はどんどん過ぎていきます。昼も過ぎ、3時も回りました。その時でした。一人の白衣を着た人が、マルチンの家のほうにやってきます。

マルチン あ、イエス様だ。イエス様が来てくださった。いらっしゃったら、始めになんと言おう？ いや、なんと言われるかな。ああ、大変だ！ イエス様に差し上げる贈り物がない。あのシモンのように、わしは、イエス様に何もして差し上げられない。ああ、だんだん近づいてくる。どうしよう…。

ナレーション しかし、その男の人は、マルチンの家の前を通り過ぎて行ってしまいました。

マルチン モノローグ なあんだ、イエス様じゃなかったのか。でもよかった。わしは、イエス様を迎える準備ができていない。差し上げるものとして何もない。そうだ、いらっしゃったら、おわびしよう。「わたしは何も差し上げるものがありません」って。でも、ゆっくりと休んでいただくこともできるし、お話しの相手もできる。そうだ、何もしなくても、わたしの“心”を差し上げることはできる。そうだ、そうしよう。

ナレーション とうとう夕方になり、家々に火がともるころになっても、イエス様はいらっしゃいません。

マルチン どうなされたのだろう？ もう日が暮れたというのに。まさか、まさか(涙ぐむ)お忘れになってしまったのではないだろうな。

ナレーション マルチンは、家々にともる灯を見つめ、涙を浮かべていました。

マルチン モノローグ さあて、わしも明かりをつけて夕食にでもするか。どうしてイエス様は来てくたさなかったのだろう？ わしの心が貧しかったからだろうか？ 贈り物がな

かったからだろうか？ いや、そうじゃなくて、わしは夢を見たのじゃないだろうか？ 一人っきりで寂しいものだから、そんな夢を見たんだ。

ナレーション —と、その時でした。外の暗やみに人影が走り、こんな声が聞こえてきました。

ステファニー (エコー) マルチン、わたしを知ってるかい？

マルチン あ、その声はステファニー。

婦人 (エコー) マルチンさん、わたしを知っていますか？

マルチン あ、あなたは、赤ちゃんを抱えていた女の方。

ナレーション そのほかにも、たくさんの方の音がして、最後に——

イエスの声 (エコー) マルチン、わたしを知っていますか？

マルチン あ、その声は、ゆうべのイエス様の声ではありませんか。

イエスの声 (エコー) マルチン、わたしは今日、あなたの家を訪ねました。そしてあなたは、わたしにとってもよくしてくれました。

マルチン おいでになったって？ わたしは、あなたのお姿は見えませんでしたよ。それにわたしは、あなたになんのおもてなしもできませんでした。

イエスの声 (エコー) マルチン、聖書を見てごらん。マタイによる福音書 25 章 35 節だ。(読む) あなたがたは、わたしが空腹であった時、わたしに食べるものを与え、わたしが渴いていた時、わたしに飲ませ、わたしが旅人であった時、わたしに宿を貸し…た。」あなたは、ステファニーや赤ちゃんを抱いた婦人のために、とてもよいことをしてあげました。そのあとの 40 節を見てごらん。

マルチン (読む) これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さいものたちの一人にしたのは、わたしにしたのです。

イエスの声 (エコー) マルチン、もうあなたは一人ぼっちじゃないんだよ。わたしは、あなたといつまでも一緒にいます。だから、あなたは、わたしに仕えるように、あなたの隣人に仕えてください。

マルチン そうでしたか。そう言えば、ステファニーと話をしている時、あの婦人のことを考えてあげていた時、わしの心は燃えていた。生き生きと輝いていた。そうだ、あのソーニャの顔のように。…そうか、イエス様はわしのところに来てくださったんだ。わしと一緒にいてくださったのに、わしは気づかなかったのだ。今日はクリスマスか。クリスマスは、そんなイエス様が、わしらのためにこの地上にいらしてくださった日なのか。

ナレーション マルチンは、ほほえみながら聖書に目を落としました。

イエスの声 (エコー) 見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは彼のところに入って、彼と共に食事をし、彼もわたしと共に食事をする。(ヨハネの黙示録 3:20)

ナレーション 外は暗く、雪がしんと降っています。でも、マルチンの心には、明るく暖か

い光が満ちていました。クリスマス之夜は、次第に更けていきました。

<完>